

千利休愛用の最高級品

能勢町で池田炭を作り続け
る小谷安義さん(78)は府職員
を定年退職後、「村にも奉公
しなければ」とこの道に入っ
た。元村長の息子から墨書き
の図面を借りてきて、窯を作
つたが、屋根が崩れて失敗。
新しい窯が出来たことで先輩
職人が一緒に炭を焼いてく
れ、技術を学んでいったが、
「商品になるには10年掛かっ
た」と振り返る。

炭を作る作業は重労働の連
続だ。まずはクヌギの木を切
る準備から始まる。「紅葉し
て葉が落ちて、木が休んで水
が少なくならいと、いい炭
は出来ない」と小谷さん。下草

を刈って準備し、12月から2月ごろまで切り出す。太さは3～10寸。山も荒れているため、木が太くなりすぎ、「これがなかなかない」と嘆く。

切ったクヌギは暖めた窯に詰め込み、火を入れる。最初は白い煙が大量に出る。次第

に黄色に変わり、再び白、そして紫色に変わる。その都度煙の色で焼け具合を計りながら、石や耐火れんがで窯の口を狭め、空気の量を調節していく。経験と勘だけが頼りだ。煙突とにらめっこしながらの作業だけに、「昔は親の死

な割れ目が入り、焼き物のような美しさを見せる。

炭焼きはわずかな失敗も許されない仕事だという。「窯の口を狭めるタイミングを間違えてもダメだし、窯を早く開けすぎると、さらに1週間丸閉じなければならない。どこ

「池田炭は能勢の伝統あるブランド。地域の伝統の火が消えないように、自分がつなぎたい」と話す。

「僕らは技術でやっている。だから気張ってる。こちらから買ってとは書いません。い

茶の湯の世界で最高の炭とされるのが、府北部で生産される「池田炭」だ。池田炭の歴史は古く、文献にその名が出てくるのは室町時代。火力が安定し、煙が少ないと、茶の湯に必要な条件を満たしており、千利休が愛用したという。最高級の評価を受け、菊の花のような断面から「菊炭」とも呼ばれる。

●菊の花のような断面が特徴の池田炭 小谷さんの窯での
炭焼きの様子（府北部農と緑の総合事務所池田分室提供）



大阪、兵庫府県境の北摂山系のクヌギで作られ、池田で集散されていたために「池田炭」の名で知られるように。池田市の久安寺の伝承では、1145年から1870年まで宮中用として献上、1595年には豊臣秀吉が同寺で観月

北摂山系のクヌギ原料

の茶会を催したと伝えられる。近年は山の荒廃や、燃料革命、職人の高齢化で生産量が減少、現在は年間3トンが生産されるだけになっている。府は茶道界などと連携し「池田炭づくり支援協議会」を04年に作り、森づくりや文化の伝承に努めている。

「僕らは技術でやつている。だから気張ってる。こちらから買つてとは書いません。いいものなら相手が賣いに来てくれるはずだから」。その言葉に、職人の誇りがにじんだ。

長男、義隆さん(44)だ。義隆さんは能勢町役場に勤務していたが、今春退職し、安義さんのもとで炭作りを学んでいる。「池田炭は能勢の伝統あるブランド。地域の伝統の火が消えないように、自分がつなぎたい」と話す。

近年、山の荒廃や職人の減少などで池田炭は危機を迎えている。府内に残る職人はわずか二、三人。唯一の後繼者が